

当報告の内容は著者の著作物です。

## 文法研究ワークショップ（第6回） 複数性（2）

開催日時：2014年（平成26年）3月18日（火曜日）13時30分～17時30分

開催場所：AA研マルチメディア会議室（304室）

### 報告1

報告者名：伊藤雄馬（京都大学大学院）

報告タイトル：無標の双数形：ムラブリ語の人称代名詞

### 報告2

報告者名：内海敦子（明星大学）

報告タイトル：バンティック語における pluractional verbs 一動作主体の複数性と行為の複数回性—

### 報告3

報告者名：大西秀幸（東京外国語大学大学院）

報告タイトル：ラワン語における選択的複数標示と定性

### 報告4

報告者名：下地理則（九州大学）

報告タイトル：琉球諸語の双数：類型と通時変化

コーディネーター：阿部優子（AA研特任研究員），梅谷博之（AA研特任研究員），

海老原志穂（AA研研究機関研究員），大島一（AA研研究機関研究員）

### ワークショップ概要：

2013年度の文法研究ワークショップは「複数性」について2回開催した。今回はその第2回目で、4名が発表した。会場の参加者は8名であった（発表者、主催者を除く）。また、Ustreamを通じてインターネット上で放送し、視聴者からの質問をソーシャルストリーム（チャット機能）により受け付けた。

ワークショップでは、名詞の複数性に関する発表に加え、動作回数や動作主体の複数性が動詞に標示される現象に関しても発表があった。また、共時的記述に加え、通時的な観

点からの考察も提示された。各発表の具体的な内容は下記の「報告要旨」を参照されたい。

報告書作成：梅谷博之（AA 研特任研究員）

## 報告要旨

### 報告 1：「無標の双数形：ムラブリ語の人称代名詞」（伊藤雄馬，京都大学大学院）

ムラブリ語（オーストロアジア語族：タイ、ラオス）の人称代名詞は、一人称と二人称において、双数形が複数形よりも無標であることを示した。

- 根拠 1：複数形は双数形から派生された形式であること
- 根拠 2：双数形の所有形は存在するが、複数形はないこと
- 根拠 3：双数形は方言間で一致するが、複数形はしないこと

双数は複数よりも有標と類型論的に言われており、その点でムラブリ語の人称代名詞は興味深い現象を提供する。

また、双数形が複数形よりも無標である理由について、ムラブリ語が農耕から狩猟採集へと生業を変える、いわゆる「文化的再適応」による人口減少が関わっている、とする仮説を提示した。

### 報告 2：「バンティック語における pluractional verbs —動作主体の複数性と行為の複数回性—」（内海敦子，明星大学）

本発表は Bantik 語に見られる Pluractional Verbs の記述と分析を試みたものである。Bantik 語はオーストロネシア語族、フィリピン諸語の一つで、インドネシアの北スラウェシ州で話されている。

アフリカ諸語などで ‘Pluractional verb’ と呼ばれている動詞は、「動作主体（主語）の複数性」「動作の回数の複数性」「動作の対象の複数性」などの概念を表すが、類似の partial reduplication を含む動詞が Bantik 語にも存在する。本発表では Bantik 語の reduplication について簡単に紹介したあと、その中の pluractional verb について詳しく述べた。要約すると、Bantik 語の pluractional verb は (I)「動作の複数回性」と (II)「主語の複数性」を表し、Actor Voice の形しか確認されていない。(I)に関しては、iterative aspect というより、habitual or occupational action を示すと言える。多くの場合は職業的な動作を表すが、高い頻度で行わ

れる習慣的な動作を表すこともある。(I)の意味で用いられるときは原則として非過去形しか用いられない。(II)に関しては、動作者が二人以上の場合に用いられ、非過去形と過去形の両方のテンスにおいて用いることができる。

### 報告 3 : 「ラワン語における選択的複数標示と定性」(大西秀幸, 東京外国語大学大学院)

本発表では、ラワン語における複数性の標示についての先行記述を批判的検証したうえで再解釈を行った。Barnerd (1934) はラワン語の複数接辞の付加、即ち、複数形の形成は随意的なものであると記述しており、その根拠として、単数形とされる裸名詞句が複数体も指示できることを挙げている。しかし、単数形を裸名詞句ではなく、数詞を伴わない類別詞句と考えることで、複数形は定の複数体を指示するために義務的に選択されなければならないと考えることができる。一方、裸名詞句は不定の物体、或いは種を指示するといえる。

### 報告 4 : 「琉球諸語の双数 : 類型と通時変化」(下地理則, 九州大学)

本発表では、南北琉球諸語 15 方言について双数形の有無を調べ、以下のような点を明らかにした。まず、単数・双数・複数の 3 項対立は主に北琉球語の奄美方言群に集中して見られる。次に、南琉球語の一部にも双数形とみてよい形式がある。奄美系の双数と宮古八重山系の双数は、ともに人称語根+数詞「2人」を起源としている。奄美系の双数は、概して人称の制限が弱く、また 1 人称双数形は包括(私と聞き手 1 人)・除外(私と(聞き手以外の) 誰か 1 人)に関係なく使われる。宮古八重山系の双数は、1 人称に限定され、包括の意味にしかない。双数形における人称制限が緩い方言は 1 人称複数における除外・包括の区別がなく、双数形が 1 人称に限定される方言は 1 人称複数における除外・包括の区別がある。結論として、おそらく双数形は琉球祖語にさかのぼり、このうち 1 人称複数における除外・包括の区別の消失があった方言群では双数形が広く発達しえたが、そうではない方言では双数形の萌芽の段階でとまっているのではないかという仮説を示した。